

附 幼 村 ど ぜ う 騒 動 記



永 倉 み ゆ き

ある朝のひとときの会話から――

「先生、ぼくなに年生まれか」

「いぬどし」

「あつたりい」(当然あたるわけだが)

「ぼくは」「のぞみちゃんは」「あたしは」

その人ごとに、犬とかいのししとか答えると、「あつたりい」と嬉しそうである。その時、テーブルの向う側にいたともやが、隣にいたけいいちちに向かつて

「けいちゃん、ぼく、なに年か」

「……」

「あのね、きょうりゅうどし」(真面目に)

「ともやくん、きょうりゅうどしだって」

「すごい」

言った方も言われた方も、一体どこまで信じ、どこまでわかっていたのやら。

このような、半分ふざけたように聞こえるまじめな会話が、子どもといると、まともな会話の中に平気で割り込んで来る。次の一件も、嘘か誠か実に混沌とした中か

ら始まったのである。

☆

☆

朝。登園の早いゆうじは、その日も一番に来て、皆が揃う時刻には、日課である自転車で幼稚園一周を済ませると（彼の一日はこれで始まる）部屋の入り口から私に叫んだ。

「先生、先生、つりざお作って、つりざお。つりするんだから」

ちょうど物置きをのぞくと、いつかかききたちがつりごっこをした時に使ったつりざお（竹棒の先にタコ糸を結びつけたもの）があったので、はい、と渡すと、

「エサもつけてよ」との注文。私がいつもの調子で近くにあった発泡スチロールのかけらをつけようとすると、
「それでつれるわけないでしょう。どじょうつるんだからあ」

と、意外にも軽蔑した声でまともなことを言われてしまった。そうになると、こちらでも頭を切り替えなくてはならない。

「じゃあ、何ならいいの」

「パンだよ。パン。きのうにいくん（お兄ちゃん）がパンでつったの」

「パンか……。じゃあ、うさぎ小屋にあるかも知れないから行ってみてよ」

私は半分、面白そうだなと思いつつも、誰か他の子のために折り紙を折りつつ答える。きっと今頃ならうさぎ当番の先生がいて、パンくずをつけてくれるだろう。もしなければ——もしなくても——何か代わりのもの（葉っぱとかみみずとか、それらしいもの）をつけて満足してくれるだろう。後でちょっと見に行ってみようかな……。などと考えて部屋にいますと、ゆうじが駆け戻って来た。

「ないんだって。ねー、パンは、パンは」

今日に限ってやけに真剣である。

「ゆうじくん、どこでつるの」

「かわだよ、かわ」

「川って、うさぎ小屋の横の川のこと」

「あったりまえだよ」

その川とは、一昨年、その年の年長さん達が、砂場に作る川じゃなくて、本物の川を作ろうと、少しずつ掘って作った細長い溝で、川というよりは、大きな水たまりに近い。あそこにおたまじゃくしがいたのは見たことがあるが、いつも子ども達が自転車で平気で乗り入れ、石木その他を投げ込み、長ぐつでばしゃばしゃ通ったりするあの水たまりに、水の生き物が住んでいたとしたら奇跡と言っても良いのではないか……。とにかく「パン」と言い張るゆうじと共に、台所に行ったが、生憎こんな時に限ってパンどころかビスケットのかけらもない。どうしようかと冷蔵庫をのぞくと、運良く（か）職員がやったクリスマス会の際に、塩辛すぎて誰も食べられなかった干ダラの切れ端が目にとまった。

「あったあった。これはいい。ほら」と見せると、

「それで良いから貸して」と、ひったくるようにビニール袋を掴むと、ダダッと川の方に駆けて行った。いかにも早くしないと、どじょう

が逃げる、といった風である。見ると、いつも仲間のひろゆきも、いつの間にかつりざおを持って一緒に駆けて行く。このころになると、周りの子たちも、「なにしてんのか」「ほくにも作って」「はるかにも」「先生、作って」

の嵐である。思わぬ反響ぶりにびっくりしつ、つりざおを作るが、作っても作っても買ひ手は尽きず、十数本は作っただろうか。作りながら、私はちらっとあの川のことを頭に浮かべ、幻のどじょうのためにこんなに一生懸命汗を流してまでやることはないんじゃないか。もしこんなに必死で仕度をして、もしどじょうがいなかったら——もしどころか、始めからあそこにどじょうなんていないのだから——一体どうなるのだろう、と心配になる。

ところが行って更におどろいた。たらいほどの広さの、川が一番深い部分に十人近くが集まってつり糸をたれているのである。その真剣な顔！ 私は一瞬、この一件は一体どう進展してどういう結末になるのだろう

と、まるで劇の観客であるかのように考えた。くり返すが、ここにはどじょうどころか、冬である今は、生き物一匹いないのである。まあいいやと心を決めると「先生、えさとれちゃった。つけて」の声に応じつつ見物を始めることにした。

しばらくそこで、エサをくくりつけたりからんだ糸をほどこいたりしていると、近くで遊んでいたきぐみ(年中)が、

「なにしてる」
と、バラバラ集まってきた。

「どじょうつってる」
と、得意になってあかぐみが答えると、意外にも「ふーん」と、寄って来る。きつと「いるわけないよー」とばかにされるだろうと思っていた私は、真面目な目付きで、

「先生、つれた」
と聞かれて、

「ううん、でも、いるのかなあ、ここに」と小さくモゴ

モゴ答えるが、誰の耳にも入らなかったらしい。そうこうしている間に、向こうからつりざおを持ったきぐみの男の子や女の子が息せききって走って来る。あつという間に小さな水たまり川のまわりはつり人たちでいっぱいになってしまった。

いつもなら、水たまりと見れば石を投げたり飛び込んだりする人たちが、やけに神妙な顔で並んでつり糸をたれている姿は何とも言えない。時折あおぐみさんが自転車を通りがかっては、

「何つってんの」
と聞いて、皆がどじょうと言うと「へエ」という顔で去って行く。

しかし、不思議なことに誰一人として「いるわけないよ」という子がいないのである。かれこれ二、三十分の間、ただ水面に糸をたれて、時々はつばがかるだけのことなのに、あきるでもなく「先生、つれないねえ」というばかりなのだ。たかがたらい程の水たまり、本当にどじょうを取るためならば、何も悠長につりざをを構

えなくても、網ですくってしまったえば良いのに、それも誰も言い出さないのだ。

ともひこは、

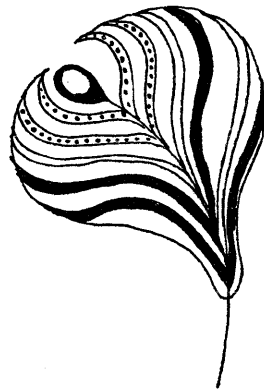
「どじょう、逃げちゃったんじゃないの。それとも隠れちゃったのかなあ」

と言う。もうちょっとなのになあ、という気持ちの込もった優しい小さな声で。

一番初めからいたゆうじとひろゆきと、つり好きのゆうじの兄の三人は、

「だめだよう、こんなに人がいちゃあ」

とプリプリしてどこかに行ってしまう。(後で知った事だが、三人は、これは本当に金魚のいる飼育小屋の池でつりを続けていた) ゆうじの兄のようすけまであんな風に言うということは、本当にどじょうがいるのかなあと、私までわからなくなり水たまり川をじっと見つめてしまう。砂場のカップや木片まで泥をかぶって埋まっているような木の葉だらけのこの川に、もしかしたら何かの拍子にどじょうが一匹紛れ込んだのかも知れない。い



や、きつとそうに違いない。またもや

「先生、つれないねえ」

の声。

「ほんとだねえ」

と、今度は私も一緒につり糸の先を見てしまう。

その日は結局おやつまでの間に、誰もどじょうをつることができず、糸をからませたりエサのタラを付けかえたりしただけで、それぞれの部屋に帰って行った。しかし、誰一人ばかりにするものも、文句を言うものも、いやや疑うものすらいなかった。何のえものもなかったのに、不思議にうち足りた気持ちだったのは、私も子ども達も一緒だったろうと思う。

子ども達が独自のアンテナと、^{ネットワー}連絡網を持っていて、何か面白そうなことが起こると、いつ知れ渡ったのかと思う程多くの子が集まってくるということは、普段の遊びでも、時々やる焼き芋でもわかっていた。しかしそれは、ほかほかのお芋や、目新しいものに魅かれてやって

来たのだと思っていたが、今日のどじょうつりの一件からそれだけではなかったのだと気付かされた。

子ども達は何かがあったから集まったのではなく、何かがあり、そうだから、そのわくわくした雰囲気魅かれて集まったのである。つまり、ここにはどじょうがいるという何の確信もないのにも拘わらず、ここでどじょうがつけられたらいいなあ、という期待を一人一人が大切に支えたために最後まで、どじょうつりを楽しんでしまったのである。確かにもし本当につれたらまた違う楽しさが加わったのかもしれない。しかし、手元には何も残らなかったのに、期待に満ちた暖かな思いは、しっかり胸に残った。

こういう出来事に会う時、偉そうなことを言ってもやっぱり子どもだ、とは私は思わない。普段わかったような口をきいていても、やっぱり子どもはすごい。さすがは子どもだ！と感心してしまうのである。

(静岡大学附属幼稚園)